

ちょうじゃやしきいせき  
**長者屋敷遺跡(第25次)発掘調査 現地説明会**

鈴鹿市考古博物館

調査期間	平成20年10月1日～平成20年12月末(予定)
調査場所	鈴鹿市広瀬町字西野
調査機関	鈴鹿市 文化振興部 考古博物館
	鈴鹿市国分町224 電話：059-374-1994
調査目的	伊勢国府跡の北側の範囲を確定すること

## 1 これまでの経緯

長者屋敷遺跡は鈴鹿市広瀬町及び西富田町、亀山市能褒野町・田村町にわたって広がる周知の遺跡で、古くから瓦等の散布地として知られてきました。昭和32年には京都大学の藤岡謙二郎氏を中心として学術調査が行われ、礎石建物等の存在から軍団を兼ねた初期国府跡だと推定されてきました。

その後しばらく発掘調査されることはありませんでしたが、平成4年から鈴鹿市教育委員会が学術調査を再開し、現在では鈴鹿市考古博物館が調査を継続しています(資料1)。これまでの発掘調査の成果から、長者屋敷遺跡が古代伊勢国の国府跡だということが判明し、その中心的な施設である政庁の構造や規模などが分かってきています。また、政庁の北側には瓦葺礎石建物が整然と立ち並ぶとともに、それらを区画する地割溝などが確認されています。

そこで、ここ数年は政庁の北側に広がる区画の範囲や構造を確認することを目的として調査を行っています。

## 2 第25次発掘調査場所について

昨年度に伊勢国府跡の北東隅だと推定されてきた場所を発掘調査（第22次）しましたが、その痕跡は見つかりませんでした。それによって、より北側で調査していた第17次調査時にみつかった東西方向の大溝SD215が国府の範囲の北の境を示す鍵となってきました。

このことから、今年度はその大溝SD215を西側に170m延長した場所を発掘調査することにしました（資料1の★印）。あわせて、調査場所はちょうど長者伝説が残る「金藪」<sup>かなやぶ</sup>の東側隣接地でもあり、金藪の性格を考える何らかの手掛かりが得られるのではないかと想定して調査を実施しました。

## 3 調査の結果（資料2, 3）

### ① 東西方向の大溝について

第17次調査で見つかった大溝SD215の延長上に、同様の大溝SD310を発見しました。SD310の規模は、幅約4.5m、長さ8m以上、深さ約0.5m程度です。溝の底には直径2cmから拳大程度の多量の礫や古代の瓦などが出土しました（資料3の写真1～3）。

この大溝SD310は東側で途切れており、17次調査区から一続きではないことが判明しました。所々途切れながら続いてくるものと推定されます。また、西側では調査区外まで続いていることが明らかで、金藪の中に向かって伸びていくようです。

### ② 金藪を囲むと考えられる溝について

金藪と呼ばれている森を囲い込むような南北溝SD312と東西溝SD315がみつかりました。両溝ともに幅1.5m、深さ0.2～0.3m程度です。長さはSD312が南北に30m以上、SD315が東西に10m程度あります。SD310と同じように礫と瓦が多く含まれていました。この2つの溝が調査区の北東でつながっているようで、その南西、つまり金藪を囲い込むような溝ではないかと推測されます（資料3の写真4～6）。

発掘調査したことがないので確定的なことはいえませんが、金藪の内部に残っている高まりが、何らかの施設の痕跡ではないかと考えています。なお、金藪は国府の中心施設である政庁の真北約580mの所に位置しており、その位置関係からも注目されます。

## 4 出土遺物

これまでに、整理箱（34.5×53×15 cm）に4箱分の遺物が出土しました。その大多数が奈良時代頃の瓦の破片です。1点のみSD312から、黒色土器こくしょくどきと呼ばれる9世紀頃（平安時代）の土器が出土しました。このことから、SD312が、平安時代の初め頃に埋まったことがわかります。

なお、出土遺物は最終的に整理箱5～6箱程度になる見通しです。

## 5 まとめ

伊勢国府跡の北側の範囲確定を目的として調査をしましたが、今回の調査でも北側の範囲を明確にすることはできませんでした。しかしながら、今回の調査成果によって①伊勢国府跡全体がより北側に広がっている可能性や、②金藪の周辺に一部北側に突出した区画があるなどといった可能性が考えられるようになってきました。

これまでに発掘調査によって確認された範囲は遺跡全体から見るとわずか数%にすぎません。そのため、現状で国府跡の全体像を説明することは困難ですが、これまでの継続した発掘調査によって重要な成果が得られてきました。以下、伊勢国府跡を特徴づけるいくつかの例をあげておきます。

- ・ 中心施設である「政庁」の建物配置が、近江国のものとそっくりであること。
- ・ 通常、政庁の南側に展開するはずの建物跡などが、反対の北側に広がっていること。
- ・ 北側へ広がっている範囲が、120m四方の区画が東西4つ、南北3つの計12区画あること。  
また、これらの区画が溝によって地割されていること。
- ・ これらの区画の間には12m幅の道路があり、内部には瓦葺の礎石建物が並んでいること。
- ・ 政庁を中心として南側で遺構が多く確認されているが、北側ほど遺構が少なくなっていることから、全体的に国府の造成途中で廃絶されたのではないかと考えられること。

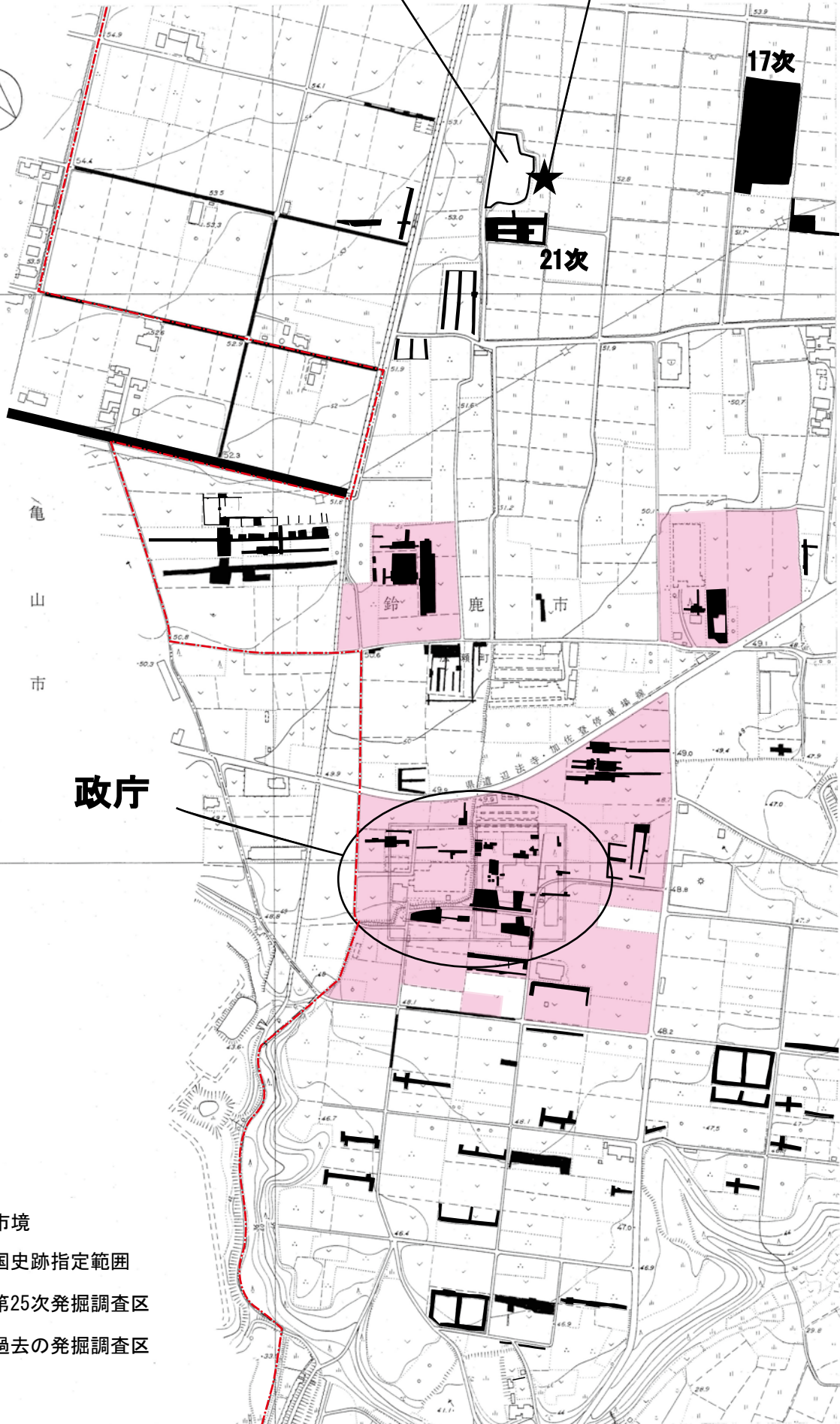
また、広瀬町にある国府跡とは別に、鈴鹿市国府町にもその字が示すとおり「国府」があるといわれています。こちらの国府町の国府跡は、広瀬町に国府が造られた前後に移転したといわれていますが、現在の三宅神社の周辺が候補地とされています。

いずれの国府跡も鈴鹿市の歴史を考える上で、非常に重要な遺跡であることは間違いありません。今後とも、広瀬町の国府の学術調査を継続して進めていくとともに、国府町にあるとされる国府についても発掘調査や遺跡の保護に努力していきたいと思っています。

金藪

25次

資料1



- 市境
- 国史跡指定範囲
- ★ 第25次発掘調査区
- 過去の発掘調査区

これまでに調査調査した場所 (S=11/5,000)

## 「金藪」について

「金藪」の記録がはじめて出てくるのは、1907年に書かれた水野福松による『高津瀬村誌』で、

「本村ノ仲土居ニアリ 古ハ木原長塚ト云フ 周圍水ヲ廻ラス長者ノ庭ト云ヒ傳フ 傳ヘテ云フ 古昔長者ノ亡ブルヤ金ヲ此ニ埋メ置キシ 若シ廣瀬村（ヒヘイ）ニ陥ルノトキハ之ヲ掘レト 其地ヲ見ルニ小高キ所ニ大石ノ横ハルヲ見ル 人云フ其大石ノ下ニアリト 反別一反六畝廿二歩」

として伝えており、これが現在知られている長者伝説の根拠となっています。

さらに、鈴木敏雄は1933年の著書『三重縣古瓦圖録』の中で、

「又コヽヨリ北約百米隔テ、字中土居ニ「カネヤブ」ト稱スル個所アリ。横約二十二米、縦約十四米ノ長方形地ヲナシ、其内ニ高約二米ノニ丘ヲ存シ恰モ一見古墳状ヲナシ、側ニ約七十呎程ノ自然石一個現ハル。里人云、此下ニ鐘ヲ埋メタリ。廣瀬退轉ノ期來ラバ之ヲ掘出セト。此ノ地ニモ同種ノ古瓦ヲ多量ニ出ス。或ハ經塚ノ類カ」

と述べています。はじめて、金藪の性格について述べたものであり、断定を避けながらも古墳や経塚などの可能性を示唆しています。

なお、最初に長者屋遺跡を発掘調査した藤岡謙二郎も「金藪」の重要性を認識していて、発掘調査による確認作業を実施しようとしたようですが、諸般の事情から断念しています。

このように、いずれの研究者も「金藪」の重要性を認識してきましたが、これまでに発掘調査など行われることなく現在に至っています。

Y=45710

Y=45720

Y=45730

Y=45740

Y=45750

X=-123360

SD315

X=-123370

X=-123380

SD312

X=-123390

X=-123400

SD310

X=-123410

X=-123420

0 10m

第25次調査区遺構平面図 (S=1/300)

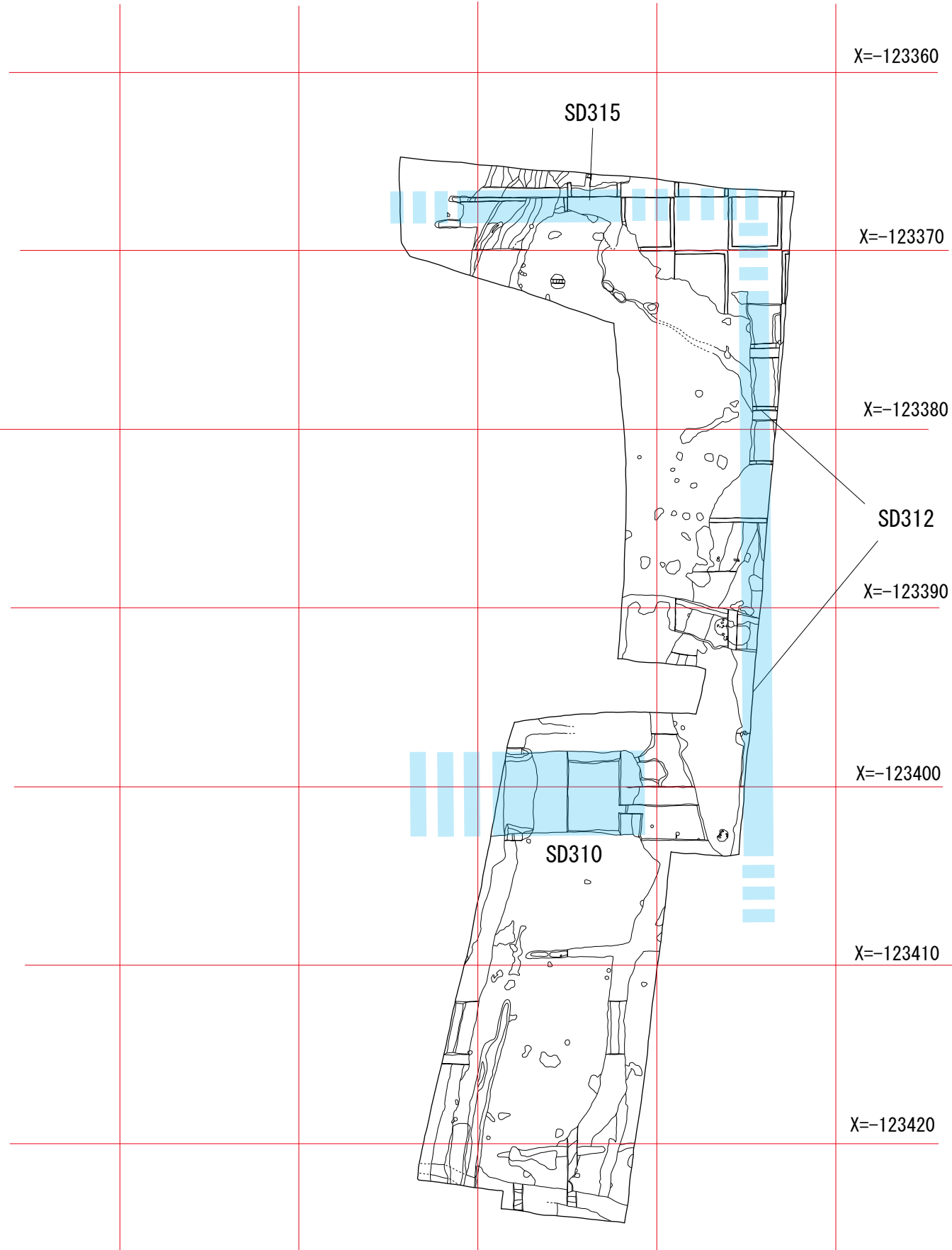




写真1 SD 3 1 0 検出状況（東から）



写真4 SD 3 1 2 掘削状況（北から）



写真2 SD 3 1 0 掘削状況（南東から）



写真5 SD 3 1 2・3 1 5 交点（西から）



写真3 SD 3 1 0 内の礫・瓦出土状況（北から）



写真6 SD 3 1 2 内の瓦出土状況（南から）

## 資料 4



写真7 SD 310 掘削風景 (南東から)



写真8 SD 310 掘削風景 2 (南から)



写真9 金藪全景 (南から)

2007年11月撮影